「ともに考え、話し合う」道徳授業のための情報誌

# あかつき道徳通信

教授用資料

No.6
2018年11月1日

巻頭コラム 背伸びが楽しい５、６年
横山 利弘（元関西学院大学教授）
実践レポート 中学校でもできる「動き」のある道徳科の授業
近野 秀樹（札幌市立あやめ野中学校教諭）

## 巻頭コラム 背伸びが楽しい５、６年

元関西学院大学教授　横山 利弘

前号では、４年生頃に顕著な新しい段階への急激な成長の様子を述べました。４年生は内面的成長に伴う疾風怒濤の時代で、子ども同士のいざこざも多いですが、その根本原因は道徳性に係る発達の違いにあります。ですから、表面化したトラブルへの対応だけでは問題は解決しません。道徳性の発達段階をなるべくそろえる必要があります。

さて、混乱が収まりを見せ始め、生活も比較的落ち着いた状態になるのが５年生の特徴です。しかし、こうした表面の様子とは裏腹に内面を見つめる力は静かに深まっていきます。抽象的な思考にも慣れていくとともに、善悪についての考えも個別の出来事にこだわるよりも様々な出来事に共通する善悪の基準を求め始めます。これが小学校５、６年の児童の発達段階なのです。

友人関係では、行動の動機について自分と同じ考え方をする人を友に選ぶ傾向が強くなります。そういう人は信用できるからです。信じられるかどうかを試金石とすることから友人関係の結束がこれまでになく強くなり、他の級友に対して排他的になることもあります。また、この時期のトラブルは信用していた友達の行為が裏切りに思えたことに起因していることが多いのです。

５、６年生では、このように内面の世界が深まりと広がりを見せている時ですから、道徳の授業も決まりきった正論やたてまえだけでは満足しません。人間の精神生活がもっと複雑でドロドロしたものを含んでいることに気付き始めているので、もっと深く人間と道徳的な価値について学びたいのです。しかし、これは大変難しいことです。

この際に教師が陥りやすい思考は、子どもを実際よりも低く見積もってしまうことです。「これは子どもたちには無理ではないか」とか「そんな難しいことは考えられませんよ」と言うのです。しかし、本当は教師も考えていない、答えられないというにすぎないのです。

ここで実例を一つ紹介します。「いじめ撲滅」というスローガンの下で開かれた大会でした。私は冒頭で、「君たちは大人に分からないようにしているが、本当は誰と誰が誰をいじめているかを知っているのではないか」と問いました。子どもたちは確かに分かっている、知っていると言うのです。「それではなぜ止めないのだ」と聞くと、「勇気がないからです」という答えが返ってきました。「では、勇気とは何だ」と聞くと、小学６年生の子どもが、「正面から向き合う力です」と答えたのです。このとき、会場にいた先生方からどよめきが起こりました。子どもたちはここまで考えることができるのです。この後、勇気は愛から出てくるものだということ、いじめを止められないのは愛が欠如しているのだということで会は終わりました。

子どもたちを低くみなしてはなりません。子どもたちはもっともっと背伸びの出来る授業を求めています。

# 中学校でもできる「動き」のある道徳科の授業

札幌市立あやめ野中学校教諭
近野 秀樹

**はじめに**　来年度の中学校道徳科完全実施に向け、中学校現場でも今まで以上に道徳教育・道徳科への関心が高まっている。とりわけ、評価文作成の方法や内容についての話題を耳にすることが多いが、教科化を迎えても、ねらいに迫る質の高い授業にするための工夫をすることが、今まで通り最も重要なことだと思う。子どもたち一人ひとりを大くくりなまとまりで個人内評価するためには、毎時間の道徳で本当に子ども一人ひとりが主役になり、「道徳的価値および人間としての生き方」について生き生きと考える授業を行っているか、改めて我々教師自身が振り返り、工夫・改善を重ねる必要があると考えている。

現在、私は本市ならびにその近隣地域の先生方との自主勉強会を通じて、「『動き』のある道徳授業」の実践研究に取り組んでいる。ここで言う「動き」は、大きく２つの構成要素からなる。１つは、教材上の設定にそって拍手等の音や登場人物の台詞、表情、行動などを再現する、いわゆる体験的な学習としての「動き」であり、もう１つは、子どもたちの気付きや発見、考えを積極的に自己表現できるよう、授業の中で教具等を活用しながら、表現方法としての「動き」を工夫することである。手段が目的化しないよう留意しつつ、教材の特性を生かした「動き」を適切に取り入れることで、言語活動（話す、書く、聞く、読む）が苦手な子どもたちも含め、全員が生き生きと考えることができ、「心が動く」授業となることを目指している。

**教材名**　仏の銀蔵

**主題名**　規範意識をもち社会規範を尊重する

**ねらい**　自らの規範意識により行動が変化する村人に自我関与する学習を通して、内面の規範意識を高め、社会規範を進んで尊重しようという道徳的心情を養う。

**内容項目**　遵法精神、公徳心〔中学校Ｃ・(10)〕
法やきまりの意義を理解し、それらを進んで守るとともに、そのよりよい在り方について考え、自他の権利を大切にし、義務を果たして、規律ある安定した社会の実現に努めること。

## 授業の構想

**■主題設定の理由**

本校の２年生の実態として、あえて法令や学校の規則を破ろうとしたり、逆らったりするような行動を取る生徒はいない。しかしながら、２学期も半ばになると、１年生のときには守れていたような簡単なルールを忘れたり、軽視したりするような様子も見られるようになってきている現状がある。

本教材は昔話の体をとっており、からすや謎の手紙により銀蔵が窮地に陥るような状況はおとぎ話風でもある。しかし、お金に執着する銀蔵、銀蔵憎さに借金を踏み倒そうとする村人、哀れな銀蔵を見て改心する村人の姿など、登場する人物は実に人間臭く、人間の真実が描かれている優れた教材である。

上述した生徒の実態を踏まえ、この教材を用いて、規則遵守について主体的に考え実践していくための内面の規範意識について考える学習を通して、「破ると怒られるから守る」「規則だから特に考えず守る」「破ってもばれなければよい」といった表面的で視野の狭い規則遵守についての捉えを改め、内なる規範意識についての考えを深めることにつなげたいと考えた。

**■指導にあたっての工夫**

この教材は、「銀蔵」への自我関与を通して考えさせる展開が一般的であるが、本実践では自らの内面と向き合い、自発的に借金を返し始める「村人」に自我関与させる展開とした。

「証文をなくした銀蔵と村人のやり取り」「借金を返し始めた村人と銀蔵のやり取り」の２場面については、会話を再現する「動き」を取り入れた。即興的に会話の内容を考えさせることにより、その時点での生徒の教材や価値に対する理解と考えが直接的に表現され、ねらいに迫れると考えたからである。

また、中心発問に対する考えをホワイトボードに記入するとともに、「共感する意見」に緑、「（自分と違うので）詳しく聞きたい意見」に青のマグネットを貼り付け、意見交流することを通して、対話を促し、考えを深めることができるよう構想した。なお、（学級内の人間関係にとらわれず）意思表明をしやすくするため、マグネットはネーム入りではなく無記名とした。

対象学年：中学校２年生
出典：「中学生の道徳２　自分を考える」
（廣済堂あかつき）

**教材の内容（あらすじ）**

●強引な取り立てで評判の悪い金貸しの銀蔵は、ある日、人々の借金を記録した証文をからすに持ち去られてしまいます。証文を取り返そうと躍起になる銀蔵ですが、うまくいかず、やがてみすぼらしく落ちぶれてしまいます。そんな銀蔵を見た人々は、証文がないのに、自分から借金を返しはじめるのでした。銀蔵が「なぜ借金を払うんだ」と尋ねると、人々は「お天道様が見てござる」と答え、銀蔵は考え込むのでした。

| | 学習活動 | 発問と予想される児童の反応 | 指導の留意点 |
|---|---|---|---|
| 〈導入〉 | ■教材への関心をもつ。 | ○友達から物などを借りたことはありますか。それはどんなときですか。<br>・忘れ物をしたので、コンパスを借りた。<br>・友達が読み終わった朝読書の本を借りた。 | 題材を意識させるだけなので、時間をかけない。 |
| 〈展開〉 | 教材を読む<br>■教材の内容をつかみ、学習課題を意識する。 | このお話は、「村人が証拠もないのにお金を返した話」でした。 | 教材を範読する。<br>内容を一文（短文）化することで、生徒の思考を読み取りから解放し、文章読解が苦手な生徒も参加できるようにする。 |
| | ■場面を即興的に再現し、村人への自我関与を通して考える。 | ○銀蔵が証文綴りを無くしたときの場面を再現してみよう。<br>銀蔵「貸したお金、返してもらおう」<br>村人「（自由に考える）」　銀蔵「（自由に考える）」<br>・村人「証拠を見せてください」銀蔵「うっ、それは…」<br>・村人「いくらですか？」銀蔵「それはわからないけど」<br>村人「いくらかわからないので返せません」<br>・村人「はい、返します」銀蔵「ありがとう」 | 借金した村人は大勢いるはずなので、本文の台詞に限らず自由に村人として考えてよいことを伝える。<br>席ごとにペアを作り再現し、数ペアに全体発表させる。 |
| | ■場面を即興的に再現し、村人への自我関与を通して規範意識について考える。 | ○村人が借金を返す場面を再現してみよう。<br>村人「これくらいの借金があったので。」<br>銀蔵「証文もないのに、なぜ借金を払うんだ？」<br>（このあとは自由） | １回目の動きと同じく、即興的に、自由に考えさせる。<br>席ごとにペアを作り再現し、数ペアに全体発表させる。 |
| | ■規範意識についての考えを深める。 | ◎村人はどうして借金を返したのだろう？<br>・盗人になりたくないから。<br>・優しいから。<br>・銀蔵のように、罰が当たりそうだから。<br>・自分が銀蔵を苦しめてると思い、罪悪感を感じたから。<br>・借りたものを返さないのは良くないから。 | ホワイトボードに意見を書かせ、全体で共有した後、「共感する意見」に緑、「（自分と違うので）詳しく聞きたい意見」に青のマグネットをそれぞれ貼り付けさせる。 |
| | | 【問い返し】借りたものを返すのが当たり前なら、どうして最初から返さなかったの？ | 意見には適宜問い返しながら考えを掘り下げる。 |
| | | ○そもそも、なぜ銀蔵からお金を借りたのですか。<br>・飢饉などで困ったから。<br>・銀蔵なら貸してくれると思った。<br>・本当は利子が嫌だけど、生活が苦しいから仕方ない。 | 村人が自主的に借金したことを想起させる。 |
| | ■広い視野から考える。 | ○ほそぼそと商いをする銀蔵と村人は、この後どんな関係を築いただろう。<br>・仲良くなった。　・良い関係になった。　・協力関係。 | 社会秩序や公徳を尊重することについて考えを広げられるようにする。 |
| 〈終末〉 | ■文章化する。 | ○今日の課題についてもう一度考え、書きましょう。授業中に考えたこと、感じたことについても書きましょう。 | 時間がなければ家に持ち帰らせ、教材を再読のうえで文章化させる。 |

▲黒板横のスクリーンに再現場面の設定等を映し出している。また、ホワイトボードに記入された考えのうち、文字が小さい（長文の）ものなどはタブレットカメラで撮影し、適宜画面に投映している。

# 実践を振り返って

■授業での主なやりとり（T：教師、C：子どもの発言）

T：では、証文を無くした場面を、C１・C２さんペア、前でやってみてください。
C１：「貸したお金、返してもらおう」
C２：「証文はあるんですか？」
C１：「ないです」
C２：「いくらかわかってから、言ってください！」
（一同、笑いと拍手）
T：つぎ、C３・C４さんペア、やってください。
C３：「貸したお金、返してもらおう」
C４：「はい、いいですよ」（笑いが起こる）
C３：「ありがとうございます」（一同、笑いと拍手）
T：素直にお金を返した村人は、どれくらいいますか？
（C４だけ手を挙げる）
T：どうしてお金を返したの？　みんな返さないみたいだけど。
C４：え、だって借りたから。俺偉いから、借りたものは返す。
T：なるほどね。偉いね。ありがとう。
T：では、お金を返す場面を、C５・C６さんペアにやってもらおうかな。
C５：「銀蔵さん、これくらいの借金があったので返します」
C６：「証文もないのに、どうして借金を払うんだ？」
C５：「払わないと、罰が当たりそうだから」
T：はい、ありがとう。（一同拍手）罰が当たりそうなんだね。では、今日の課題です。ホワイトボードに書いてください。村人はどうして借金を返したのだろう。
（ホワイトボードを黒板に貼り、全員分読んでから共感する意見と詳しく聞きたい意見にマグネットを付ける。）
T：C６さん。「自分のせいで銀蔵が貧乏になるのを見ると罪悪感でいっぱいだったから。」どういうこと？
C６：銀蔵が困ってたから。
T：困ってたから。じゃあ、まだ２０両もっていて、偉そうにしてたら、返さない？
C６：（少し考えて、うなずく）
T：なるほど。C７さんは「優しいから。」そうか。お金を返すことは、優しいことなんだ？
C７：（うなずく）
T：なるほど。別の（逆のような）意見もありますね。C８さん。「借りたものは返さなきゃだめだから。」
C８：いくら相手が銀蔵でも、借りた金だから。
T：返すのは優しいことじゃないの？
C８：え、……返すのが当たり前。
T：借りたものは返すのが当たり前なんだ。他にも似たことを書いた人、どうですか？　C９さん。
C９：返します。
T：当たり前に？　（C９：うなずく）
T：では、「盗人になりたくないから」という人。たくさんいますね。C１０さん。
C１０：え、C９さんとかと同じで。やっぱり借りたから。
T：同じ意見だった人、どうですか？（C４含む数名、うなずく）
T：あれれ、おかしいなぁ。C４さん、どう思う？
C４：え？
T：だって、証文がなくても、最初からお金を返した人は、C４さんだけだったよね？
C４：はい。
T：他の人も「返すのが当たり前」だって言ってるけど。
C４：だったら最初から返せよ！（一同、笑い）
T：（笑）はい、先生も思いました。C８さん、どうして最初は返さなかったの？　（C８：考え込む）
T：じゃあ、質問を変えます。そもそもどうして銀蔵からお金を借りたの？（みんなに向かって）
C１１：利子が高いけど、どうしても生活が苦しいから。
C１２：銀蔵さんなら貸してくれそうだから。
T：なるほどね。じゃあ、元にもどろう。どうして借金を返したの？
C１３：（少し考えて）借りたものを返していない自分に気付いた、っていうか。
T：かわいそうな銀蔵を見て？
C１３：うーん、気付いたのもあるし、最初から少し思ってて、だんだん大きくなっていったというか。

■おわりに

本実践では「動き」を取り入れて村人に自我関与することを通して、文章読解が苦手な生徒なども積極的に授業に参加し、活躍することができた。このように「動き」のある道徳授業では、普段はあまり話さない生徒、振り返りも少ししか書かない生徒も、よく考えていたり、考えが変わったり、他者の意見に興味をもったりする様子（学習状況）をよく把握することができる。他の教材ではどんな「動き」が工夫できるか、これからも研究を重ねていきたい。

**あかつき道徳通信　No.6**　教授用資料

発行　廣済堂あかつき株式会社
本資料の内容についてのお問い合わせは、小社編集部　（TEL :03-6435-6690）までお願いします。

廣済堂あかつき
〒176−0021　東京都練馬区貫井４−１−１１
TEL :03-3577-8966　　FAX :03-3577-8967

バックナンバーは、下記 HP でご覧いただけます。
http://www.kosaidoakatsuki.jp